

## クレア パーバーと吉田 晃良 交流日誌Ⅲ

クレア作品制作風景見学。

本殿から山頂へ上がる途中、朱塗りの鳥居がどこまでも続く千本鳥居をやっとくぐり抜けると、山の冷気が、残暑の中を歩いて来た体を心地よく冷やしてくれる。京都の南部、伏見区深草、伏見稲荷大社、通称は”伏見のお稲荷さん” 毎月一日には、商売繁盛を願う人たちで非常な賑わいを見せる。

その稲荷大社から奥の院へ通じる道の途中、青木ヶ滝の横を山手に入る幅の狭い十五段石段が、今回クレアが選んだ作品制作場所である。

クレアは来日して一か月経ったころから、京都だけでなく奈良にも足を延ばし制作の場をリサーチしていた。会う度、見せてくれる手帳に、私が見てどこだか分からない場所の写真と作品プランが描かれていた。

9月3日 4:30pm

京阪電車伏見稲荷駅で川嶋さんと待ち合わせ、クレアの制作現場を訪ねる事になった。この日は夕刻でもあり、静まり返っている参道、境内を抜け、竹林、雑木林、弘法ヶ滝の冷気を感じながら進む。やがて少し拓けた場所にでると、山手に小さな石段が見え、そこがクレアの制作現場だった。

一休みしているクレアの腕や足には、蕨蚊に刺された跡が多数残り、制作中の大変さを物語っていた。私たちは早速蕨蚊対策をしながら、制作現場と作品の写真撮りを始める。陽が翳って撮影が出来なくなる5:30頃まで写真を撮り続けた後、私たちはクレアより一足先に下山した。

9月4日

昨日撮った写真が出来上がった。以前、クレアが私に見せた手帳の作品プランと彼女の実作がほぼ同じ出来上がりになっていた。

9月23日 (火) 2:30pm

クレアと通訳をしてくれる板倉さんを交え、「表現を通して」の企画の一つ、二人のコラボレーションについて打ち合わせ会議を行う。すでに9月3日(水)に、クレアがイメージを湧かせることが出来るという私の過去の作品(金箔、銀箔を貼った布地)の一部を渡しておいた。その布地はかつて制作したもので二十年近く経っている為、表面が古びた「裂」のようにになっている。それに対してクレアがどんなプランを持ってくるのか、楽しみにしていた。

今回の二人のコラボレーション作品に、この布素材を使おうと決めたのは、クレアが会う度に見せる彼女が撮ってきた写真のイメージからだった。

クレアが来日してから、京都周辺ををリサーチし、撮り始めた写真の内容は、『朽ち果てた土壁』『土蔵の白い壁が剥がれ、崩れかけている』『百年以上経た町

屋の再生の為潰された玄関や奥座敷』等である。クレアは、時間の経過したものの表層、刻々と変化し続けている表面に強く関心を持ちそこから作品のイメージを求めているようであり、それらの写真を自分の制作ノートに多数貼付けていることから窺える。但し、私はクレアがそれらに強い興味を持っている理由を尋ねたことはない。そのことについては、クレア自身が報告することだろう。私は、機会があればその報告を理解することをしたい。2：30から始めたコラボレーションについての話し合いも5：00近くまで続いた。議論の末、二人の共通の決めごとは、壁に掛ける作品としての平面作品の形式、50cm X 50cmのユニット作品、また、奥行き（厚さ）は自由、2点以上作品制作し、壁に各々の作品を並列で展示することが決まった。

クレアは写真の一部をキャンパスにして、その上にビニール素材やナイロン素材を使って制作、私は、金銀箔を貼った古びた布地のキャンパスの上に行為を加えることでお互い了解した。各自が別の場所で制作し、展示が行われる美術館又はギャラリーの壁上でコラボレーションを完成さすことを楽しみに、この打ち合わせを終了した。